

『嵐が丘』における「所有」の観念

河野 豊

はじめに

エミリー・ブロンテ (Emily Brontë, 1818-48) の小説『嵐が丘』(Wuthering Heights, 1847) は、周知の通り、スラッシュクロス屋敷を借りた借家人ロックウッドが、大家であるヒースクリフに会うために、「嵐が丘」という名の屋敷を訪問する場面から始まっている。いや、もう少し正確に言えば、その訪問を既に終えたロックウッドがスラッシュクロスに帰ってきた後で、訪問について回想する場面から始まっている。その場面は借家人の大家に対する型どおりの挨拶ではある。しかし、ヒースクリフに関心を抱いたロックウッドが彼の過去をネリーに尋ねることによって小説が展開していくことを考えれば、この場面は極めて重要である。そしてそこに何気なく表わされた一つの観念は、『嵐が丘』という小説全体を通して通奏低音のように流れているように思われる。その観念とは、即ち、「所有 (possession)」の観念である。小論では、その「所有」という観念がどのように表現されているかを詳しく検討し、その観点から『嵐が丘』を読み直してみたい。

1

以下、物語の展開を追いながら、「所有」という観念がどのような形で表現されているかを順に見ていこう。

「何気なく表わされた」と先ほど書いたように、「所有」という語が冒頭の場面で実際に使われている訳ではない。その観念はロックウッドの言葉を遮ってヒースクリフが述べる次の言葉に表わされている。

‘Thruscross Grange is my own, sir,’ he interrupted, wincing, ‘I should not allow any one to inconvenience me, if I could hinder it—walk in!’⁽¹⁾

この「スラッシュクロスは私のものだ」という言葉は、ヒースクリフが小説の中で初めて発する言葉であり（この前の部分で、ロックウッドに“Mr Heathcliff?”と聞かれても、ヒースクリフは頷くだけで何も話さない）、ロックウッドがスラッシュクロスの借家人になるにあたっての経緯をくどくど述べているのを遮ってのものである。ヒースクリフがスラッシュクロスの主人であることを端的に示す言葉である。

そもそもヒースクリフは先代のアーンショーが嵐が丘に連れ帰ってきた子供であり、その時の経緯は、以下のごとくであった。

... he picked it up and inquired for its owner—Not a soul knew to whom it belonged, he

said....(p. 37)

幼いヒースクリフ (“it”と表現されている)は拾われたが、その「所有者」が不明だったのでアーンショーが自宅に連れて帰ったのであった。つまり、ヒースクリフが『嵐が丘』という小説内において存在し始める最初の契機が、所有者不明の状態からアーンショーの所有物への変化である。このエピソードは、子供は大人の所有物であることを表わしていると言えるだろう。かくしてアーンショーの所有物になったヒースクリフは、アーンショーによって大切に扱われる。アーンショーにとっては自らの所有物であるから当然のことである。しかし、アーンショーには別の所有物、すなわち、ヒンドリーとキャサリンという子供がある。ヒースクリフがこれら二人の子供と様々な葛藤を起こすのもまた当然と言える。小説の前半では、ヒースクリフがいかにして彼らとの関係(良し悪しは別にして)を築いていくかが描かれる。

また、ロックウッドの訪問の場面でもう一つ重要なのは、表玄関のドアの上方に彫ってある「1500年」という年代と「ヘアトン・アーンショー」という名に彼が気づくところである。

... and especially about the principal door, above which, among a wilderness of crumbling griffins and shameless little boys, I detected the date '1500,' and the name 'Hareton Earnshaw.' (p. 4)

その名はもちろんその屋敷の創設者を指し、かつてその名を持った者が正当な所有者であったことを示す。そしてさらにそれはその名をもつ者こそ、この屋敷を所有する権利をもつのだということさえ暗示するであろう。

さて、ヒースクリフとヒンドリーとの関係は「所有」を巡って悪化する。それは子馬をめぐるエピソードに表われている。アーンショーは馬を二頭買ってきて、ヒンドリーとヒースクリフにそれぞれ与えるが、ヒースクリフはいい方の馬を取ったのに、それがびっこになるとヒンドリーに対して馬を交換するように要求する。

'You must exchange horses with me; I don't like mine, and if you won't I shall tell your father of the three thrashings you've given me this week, and show him my arm, which is black to the shoulder.' (p. 39)

ヒースクリフはヒンドリーがその週に自分を打ちのめした回数をちゃんと覚えており、それをもとにヒンドリーをいわば恐喝する。ヒンドリーはヒースクリフをののしり、痛めつけながらも、子馬をあきらめる。この場面では、酷い目に遭わされても自分の所有欲を満たす方を優先するというヒースクリフの意志の強さがよく表われている。興奮しているのはヒンドリーだけで、ヒースクリフはあくまでも冷静である。ヒンドリーがここで叫ぶ“you beggarly interloper!”という言葉はヒースクリフの本質を的確に示している。しかしヒースクリフはヒンドリー相手とは違い、キャサリンに対しては、別の態度を採る。ヒースクリフがネリーに言う言葉、“When would you catch me wishing to have what Catherine wanted?”(p. 48)からもそれはわかる。キャサリン相手だとヒースクリフの所有欲は発揮されないように思われる。あるいは別の仕方で表われるとも言えるが、それについては後述する。

さて、子馬のエピソードの後、しばらくしてアーンショーが死に、大学へ行くために家を離れていたヒンドリーが妻を連れて嵐が丘に帰ってくる。ヒンドリーは父親の財産を受け継ぎ、嵐が

丘の主人としてヒースクリフを使用人に格下げし抑圧する。「所有者」の死によって、ヒースクリフの嵐が丘における位置ははなはだ不安定なものになる。キャサリンはスラッシュクロスのエドガーと親しくなり、結婚を考える。ヒースクリフはキャサリンとネリーの話を一立ち聞きし、嵐が丘を去る。ヒースクリフは失踪後3年経ってから戻ってくるが、その間嵐が丘とスラッシュクロスでは、キャサリンがエドガーと結婚してスラッシュクロスに移ったこと以外、事件らしいものは何も起こらない。読者はあたかもヒースクリフがいきなり成長して再び姿を見せたかのような錯覚に陥る。ヒースクリフがいなければ『嵐が丘』という小説が展開していかないかのようなのである。

さて、戻ってきたヒースクリフは、嵐が丘に滞在するが、その理由の一つとして、キャサリンはその家に対する彼の「愛着 (attachment)」を挙げる。

But, Heathcliff affirms his principal reason for resuming a connection with his ancient persecutor is a wish to install himself in quarters at walking distance from the Grange, and an attachment to the house where we lived together....(p.98)

「家」というものに対する「愛着」がどのようなものかについては後に検討することになる。

ヒースクリフは嵐が丘でヒンドリー相手にカードをすることで彼を破産させ、一方で、スラッシュクロスのイザベラを手に入れることでその家に乗っ取る。ヒースクリフは、「彼女は兄の相続人だね」(p.105) と言うことでその野望をはやくから見せる。キャサリンはヒースクリフの再登場によって、エドガーに対する愛情を失っていく。

I don't want you, Edgar; I'm past wanting you ... Return to your books ... I'm glad you possess a consolation, for all you had in me is gone.(pp.126-27)

ヒースクリフはイザベラと駆け落ちした後、結婚して嵐が丘に戻ってくる。ヒンドリーは財産を全てヒースクリフに奪われており、極度に興奮している。

Am I to lose *all*, without a chance of retrieval? Is Hareton to be a beggar? Oh, damnation! I *will* have it back; and I'll have *his* gold too....(pp.138-9)

エドガーはネリーからイザベラのことを聞いても、「I'm sorry to have lost her」と言うだけで積極的に動こうとはしない。

イザベラはヒースクリフがエドガーへの支配欲から自分と結婚したのだと言う。エドガーへの支配欲はすなわちスラッシュクロスという屋敷への所有欲になるであろう。

... he says he has married me on purpose to obtain power over him....(p.149)

そして小説は、キャサリンの死と出産、イザベラの家出、イザベラの出産、ヒンドリーの死、と、死と出産を繰り返しながら慌ただしく進む。ヒースクリフは、自分の子(リントン)に対する所有欲を早くも見せる。(‘But I'll have it,’ he said, ‘when I want it....’(p.182))

ヒンドリーの死によって、ヒースクリフは名実ともに嵐が丘の主人となる。顧問弁護士はネリーに対しそれを裏付けることを言う。

He shook his head, and advised that Heathcliff should be let alone; affirming, if the truth were known, Hareton would be found little else than a beggar.(p.184)

ヒースクリフは、ヒンドリーの子、ヘアトンに、“Now, my bonny lad, you are *mine!*”(p.185) と言うことで、ヘアトンが自分の所有物になったことを確認する。そして、ネリーはそうした事情を要約して次のように語る。

The guest was now the master of Wuthering Heights: he held firm possession, and proved to the attorney, who, in his turn, proved it to Mr Linton, that Earnshaw had mortgaged every yard of land he owned for cash to supply his mania for gaming: and he, Heathcliff, was the mortgagee.(p.186)

ヒースクリフは嵐が丘の所有権を法的にも確立したところで、物語は一挙に12年後の話になる。キャサリンの子、キャシーは13歳になっており、ある日偶然嵐が丘に行ってしまう。そこで、キャシーはヘアトンと次のような会話をして、ヘアトンを恥じ入らせる。ヘアトンにしてみれば、本来は自分の家になるはずだった嵐が丘で、使用人同様の立場にいることを改めて実感させられることになる。

‘It’s *your* father’s, isn’t it?’ said she, turning to Hareton.

‘Nay,’ he replied, looking down, and blushing bashfully.

He could not stand a steady gaze from her eyes, though they were just his own.

‘Whose then—your master’s?’ she asked.

He coloured deeper, with a different feeling, muttered an oath, and turned away.

‘Who is his master?’ continued the tiresome girl, appealing to me. ‘He talked about “our house” and “our folk.” I thought he had been the owner’s son. And he never said, Miss; he should have done, shouldn’t he, if he’s a servant?’ (pp.192-93)

嵐が丘にいる使用人のジョウゼフは、そうしたヘアトンに家系の誇りを吹き込むことで、ヘアトンとヒースクリフとを対立させようとする。

Joseph had instilled into him a pride of name, and of his lineage; he would, had he dared, have fostered hate between him and the present owner of the Heights....(p.195)

さて、イザベラが死んで、子供のリントンは、まずスラッシュクロスに引き取られてくるが、父親であるヒースクリフは、当然その子を嵐が丘に連れてくることを要求し、その通りになる。嵐が丘にリントンを連れてきたネリーにヒースクリフは、次のように言う。

‘I feared I should have to come down and fetch my property myself—You’ve brought it, have you? Let us see what we can make of it.’(p.205)

ここでヒースクリフは自分の子リントンを“property”と呼んでいる。つまり所有者は自分だということである。そしてリントンとの関係で、スラッシュクロスをも我が物にすることまで視野に入れている。それはその後のヒースクリフの科白からも明らかである。

... ‘my son is prospective owner of your place, and I should not wish him to die till I was certain of being his successor. Besides, he’s *mine*, and I want the triumph of seeing *my* descendant fairly lord of their estates....’ (p.206)

その後さらに3年ほどたって、キャシーとネリーが嵐が丘の敷地に入り込んで、ヒースクリフと対面する場面でも、ヒースクリフは次のように言って、そうした考えを繰り返して表明する。

‘My design is as honest as possible. I’ll inform you of its whole scope,’ he said. ‘That the two cousins may fall in love, and get married. I’m acting generously to your master; his young chit has no expectations, and should she second my wishes, she’ll be provided for, at once, as joint successor with Linton.’ (p.213)

もちろんヒースクリフはキャシーとリントンを結婚させることで、スラッシュクロスを自分のものにするつもりなのである。エドガーは娘のキャシーにヒースクリフがいかにひどい人間かを説明する。

My master, perceiving that she would not take his word for her uncle-in-law’s evil disposition, gave a hasty sketch of his conduct to Isabella, and the manner in which Wuthering Heights became his property. (p.220)

それでもキャシーはリントンに好意をいだくようになる。ただその好意は愛情と言うよりはむしろ子供がおもちゃを欲しがるといふようなものである。それはキャシーの科白、“He’s a pretty little darling when he’s good. I’d make such a pet of him, if he were mine” (p.239) から見て取れる。

そのうちエドガーは身体の調子が悪くなり、キャシーが自分の生まれた家にとどまることができないためには、リントンと結婚するしかないと考え始める。

... though he had set aside, yearly, a portion of his income for my young lady’s fortune, he had a natural desire that she might retain, or, at least, return, in a short time, to the house of her ancestors; and he considered her only prospect of doing that was by a union with his heir.... (p.256)

やがてキャシーはネリーとともに、ヒースクリフとリントンによってなれば無理矢理に嵐が丘に連れて行かれる。そこで、ヒースクリフはかねてからの計画通り、リントンとキャシーを結婚させるが、その際にヒースクリフは、キャシーにこう言う。

I give you what I have; the present is hardly worth accepting; but, I have nothing else to

offer. It is Linton, I mean.(p.267)

ヒースクリフはリントンがあくまでも自分の所有物であり、従って、その「処分」は自らの裁量で自由にできることを説明する。リントンはリントンで、ヒースクリフのそうした意向に忠実であり、キャシーに対して、高圧的な態度を採る。

'He says I'm not to be soft with Catherine—she's my wife, and it's shameful that she should wish to leave me! He says, she hates me, and wants me to die, that she may have my money, but she shan't have it....' (p.276)

こうしたリントンの態度は、「所有」をめぐるもっとも激しいものになる。

... I'm glad, for I shall be master of the Grange after him—and Catherine always spoke of it as *her* house. It isn't hers! It's mine—papa says everything she has is mine. All her nice books are mine—she offered to give me them, and her pretty birds, and her pony Minny, if I would get the key of her room, and let her out: but I told her she had nothing to give, they were all, all mine. And then she cried, and took a little picture from her neck, and said I should not have that—two pictures in a gold case—on one side her mother, and on the other, uncle, when they were young. That was yesterday—I said *they* were mine, too; and tried to get them from her....(p.277)

リントンはこのようにキャシーを含むスラッシュクロスの全てを「所有」することを望むのだが、そのリントン自身はヒースクリフに「所有」されている。それ故、スラッシュクロスもヒースクリフの「所有」に帰す。それは既にエドガーが懸念していたことである。

He divined that one of his enemy's purposes was to secure the personal property, as well as the estate, to his son, or rather himself....(p.279)

エドガーが死ぬとヒースクリフは、もう自分の家のつもりでスラッシュクロスに入ってくる。その時の様子を、ネリーは、次のように描写する。

He made no ceremony of knocking, or announcing his name; he was master, and availed himself of the master's privilege to walk straight in, without saying a word.(p.283)

ここに至って、ヒースクリフは嵐が丘とスラッシュクロスとの両方を手に入れることになる。その後、リントンが死ぬが、既にスラッシュクロスを手に入れたヒースクリフにとって、リントンは用済みの存在であったから、その死は何の影響も及ぼさない。もっともリントンは自分の動産全てをヒースクリフに譲るといふ遺言を残していたので、ヒースクリフの財産は増えることになったが。

He had bequeathed the whole of his, and what had been her moveable property to his father.... The lands, being a minor, he could not meddle with. However, Mr Heathcliff has

claimed, and kept them in his wife's right, and his also—I suppose legally, at any rate Catherine, destitute of cash and friends, cannot disturb his possession. (p.291)

さて、以上のような顛末を語って、ネリーの話は終わる。ロックウッドは再び嵐が丘に行き、ヒースクリフに、最初の契約以降はもうスラッシュクロスを借りる気はないと告げる。ヒースクリフは、“But, if you be coming to plead off paying for a place you won't occupy, your journey is useless—I never relent in exacting my due from any one.”(p.301) と言って、金にうるさいところを見せる。

数ヵ月後、たまたまスラッシュクロスを訪れたロックウッドは、嵐が丘のことが気になって、そこを訪れ、ネリーからヒースクリフが死ぬまでのいきさつを聞くことになる。ネリーの話の中で、特徴的なのは、キャシーとヘアトンの仲の良さとヒースクリフの死ぬまでの異常とも言える行動である。ヒースクリフは、自分の死が近いことを悟ったとき、弁護士を呼ぼうと言い、次のように語る。

‘I wish to make some legal enquiries of him, while I can bestow a thought on those matters, and while I can act calmly. I have not written my will yet, and how to leave my property, I cannot determine! I wish I could annihilate it from the face of the earth.’(p.329)

自分の死後は自分の財産を消滅させたいという願望を明らかにするのだが、それはヒースクリフの飽くなき所有欲の表れなのであろう。自分以外のものが自分の財産を所有することは許さないというわけである。しかし、実際にはそれは不可能なのである。

結局、ヒースクリフは全ての財産を残したまま、死んでしまい、それらは結婚予定のキャシーとヘアトンのものになる。ネリーは、そのことを喜んで、“I ... returned thanks that the lawful master and the ancient stock were restored to their rights.”(p.332) と述べる。ヒースクリフの飽くなき所有欲は、ヘアトンとキャシーのためのものであったとすることができる。

以上、『嵐が丘』という物語を「所有」という観点から読み直してみたが、その物語の中では、ほとんどの人物が強い所有欲を持っていることがわかる。使用人のジョウゼフにしても、自分のスグリの灌木をキャシーとヘアトンに抜かれてしまい、烈火のごとく怒り、嵐が丘を出ていくとまで言う。物語の中で、「所有」ということに関わっていないのは、語り手ネリーと聞き手ロックウッドを除けば、ヘアトンだけであるとさえ言えるだろう。そのことが持つ重要な意味については後述する。残りの人間は多かれ少なかれ自分の「所有」について敏感である。中でもヒースクリフはその極致である。

2

今まで「所有」という言葉を何の説明もなしに使ってきたが、ここで改めてその意味を考えながら、ヒースクリフとキャサリンの関係を見てみよう。

ジャック・アタリによれば、「所有」の背後に秘め隠されているものは「死の恐怖」である。人は、「存在し、存続し、死を遅らせる」⁽²⁾ (傍点原文、以下同) ために、「所有」しなければならない。

人は持つならば在る。(中略) 個人——ないし民族——はその所有(固有性)によって、

アイデンティファイされ、弁別される。つまり、自分の名前、言語、土地、所有が、そのアイデンティティを告げるからである。人は彼が持つところのものである。⁽³⁾

ヒースクリフはアーンショーに拾われ、その「所有物」となることで、物語の中に登場し、名前を与えられ、「存在」することができた。名前を与えることは即ち「所有」することである。そして「所有」がなければ、「存在」もない。ヒースクリフがキャサリンとネリーの話を立ち聞きし、嵐が丘から失踪した後に、そこに戻ってきて、手始めに嵐が丘を「所有」することにとりかかるのも、ヒースクリフがその「存在」を嵐が丘の「所有」によって、再び確立したいからに他ならない。失踪前のヒースクリフは、「所有者」アーンショーの死によって、その「存在」が脅かされていたからである。

嵐が丘という「家」の「所有」をヒースクリフが始めるのは、そもそも「所有」は「家」において最も特徴的なことであるからである。それはエマニュエル・レヴィナスが次のように述べている通りである。

所有は家にもとづいている。家によって集められ維持されうる家財〔持ち運び可能なもの〕として事物が所有されるのと同じ意味で、家は所有されるのではない。そもそものはじめからその所有者を歓待するものであるがゆえに、家は所有されるのである。⁽⁴⁾

最初からヒースクリフは嵐が丘に「歓待」されているわけではないが、その「所有者」になることで、そうになっていく。嵐が丘という「家」は、ヒースクリフにとって単なる家ではなくて、ヒースクリフの存在の基盤となっていると言ってよい。

人間の生が位置づけられている諸目的の体系のうちで、家は、ある特権的な地位を占めている。(中略) 人間の活動性の条件であること、条件であるという意味において人間の活動性の端緒であること、それが家の特権的な役割なのだ。⁽⁵⁾

こうしてヒースクリフはその「活動性」を発揮し、スラッシュクロスの「所有」へも向かうことになる。スラッシュクロスを「所有」した後もヒースクリフが嵐が丘に住み続けるのは、嵐が丘がヒースクリフにとって「特権的」な存在であるからと言える。

人間はそれが所有するものの内面にある。とするなら、一切の所有の条件たる住み処によって内面的生は可能になると言うことができよう。つまり、自我は我が家にいるのである。⁽⁶⁾

幼い頃キャサリンと一緒に過ごした嵐が丘こそ、ヒースクリフの「我が家」なのである。従ってヒースクリフは嵐が丘にいるときにその「内面的生」を営むことができる。ヒースクリフのキャサリンへの思いは、嵐が丘という「家」への思いとなっているのである。

ヒースクリフは、嵐が丘とスラッシュクロスの全てを、その中の人間をも含めて、支配し、「所有」することに成功した。ただ一つ、死んだキャサリンを除いて。逆に言えば、キャサリンを「所有」できなかったからこそ、ヒースクリフは、その所有欲を嵐が丘とスラッシュクロスへと向けたということもできるであろう。

また、小説のまだ最初と言ってよい箇所、キャサリンが叫ぶ“I am Heathcliff”(p.82) という科白は、ヒースクリフとキャサリンとの関係の端的な要約である。なぜならば、「所有とは(他)

が私のものと化しつつ〈同〉となる際の形式の最たるものである」¹⁷⁾から。つまりキャサリンにとって、ヒースクリフという存在との一体化こそ、真に望むことであった。それはヒースクリフにとっても同様であろう。ヒースクリフは「所有 (possession)」に取り憑かれて (possessed) いる。もっと言えば、ヒースクリフはキャサリンを「所有」することに「取り憑かれて」いる。それは、レヴィナスの言う「享受においては、どんな能動性も感受性に先だつてはいない。それどころか逆に、享受しながら所有することは所有され取り憑かれることでもある」¹⁸⁾ということである。ヒースクリフとキャサリンは互いを「享受」したいがために、互いに取り憑いている (possessed) と言ってよいであろう。ヒースクリフが最後にネリーに語る話はキャサリンが彼に取り憑いていることを表している。

ヒースクリフが死ぬ前に、自分の財産をすべて「消滅」させたいと願うのは、実は、1の最後で述べたような飽くなき所有欲の発露ではなくて、逆に自らの死によってキャサリンと一体化できる、即ちキャサリンを「所有」できる、という確信からくる「所有」の廃棄なのである。アタリが言ったように、「所有」には「死の恐怖」が隠されているとするならば、既に「死の恐怖」を持たなくなったヒースクリフが、その「所有」を廃棄するのも当然である。生きているときには叶わなかったキャサリンの「所有＝一体化」は死んでから叶ったと言えるだろう。

おわりに

1で『嵐が丘』を詳しく検討し、「所有」という観念が小説全体に満ちあふれていることを指摘した。しかし、そこでも述べたように、ただ一人「所有」という観念とは無縁であると思われる人間がいた。つまり、ヘアトンである。彼は、ヒンドリーの子として嵐が丘に生まれ、本来ならばその家の正当な跡継ぎになるはずだったが、ヒースクリフの登場によって、その立場が脅かされる。しかし、そうなってもヘアトンは動じない。与えられた仕事をすることで日々の生活を送っている。そして最終的には、彼は嵐が丘を受け継ぐものとしての地位を回復する。激しい所有欲を示したリントンが早死にするのとは対照的である。1の最後に引用した、ネリーの言葉を再び引用するならば、「正当な支配者と古い家柄の人々がその権利を回復した」のである。ロックウッドが最初に嵐が丘を訪問したときに気づいた、表玄関のドアの上に彫ってある「ヘアトン・アーンショー」という名を持つ者が正当な後継者になったのである。名前をつけることが「所有」となることが象徴的に表わされていると言える。『嵐が丘』という小説は「所有」に始まり、「所有」に終わると言ってもよいであろう。

註

- (1) Emily Brontë, *Wuthering Heights* (Penguin Books, 1995), p.3. 以下同書からの引用は本文中の括弧内にページ数を示す。
- (2) ジャック・アタリ著山内視訳『所有の歴史——本義にも転義にも』(法政大学出版会、1994)、P.6。
- (3) 同書、p.7。
- (4) エマニュエル・レヴィナス著合田正人訳『全体性と無限』(国文社、1989)、p.237。
- (5) 同書、pp.228-29。
- (6) 同書、p.194。
- (7) 同書、p.52。
- (8) 同書、p.238。